

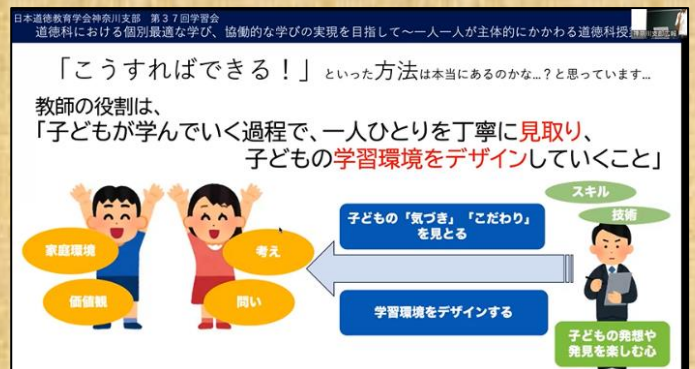
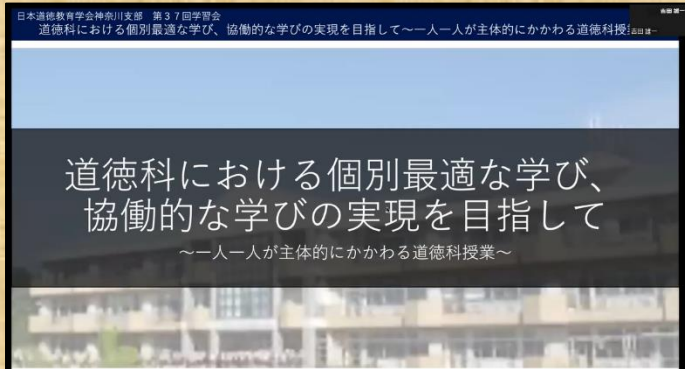
第37回 日本道德教育学会科奈川支部 学習会（R5年6月24日）

提案① 横浜国立大学教育学部附属横浜小学校 小山統成 先生

「**道徳科における個別最適な学び、協働的な学びの実現を目指して ～一人一人が主体的にかかわる道徳科授業～**」

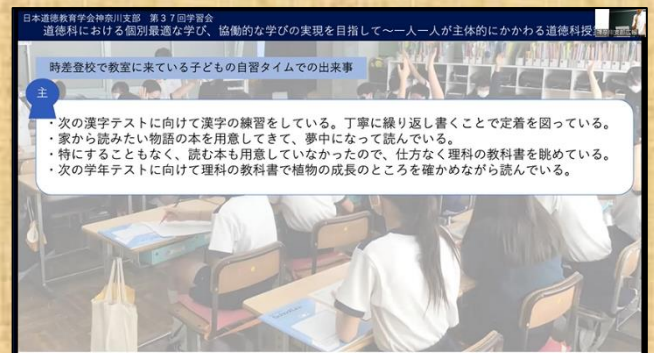
○研究テーマ「主体的にかかわる」について

- ・誰が？何と関わる？そのためにどうする？の視点をもつ。
- ・教師の役割→子どもを丁寧に見取り、子どもの学習環境を教師がデザインしていく。
- ・スキルだけでなく教師自身も、授業の中での発見を楽しむことを大切にしていく。



○教室の子どもを見る時の視点

- ・授業中の活発な意見交換、挙手、反応等→これはあくまで「**クラス全体**」としての様子である。
 - ・朝自習の子どもを見たとき、本を読んでいる子、漢字の復習をしている子、理科の教科書を見ている子…
- 「子ども一人一人」を見ていくとわかることがある。
「子どもたち」と一括りにしていないか注意してみる。



○ユニットの実践より

- ・命をテーマにしたユニット
- ・一時間目「あなたの時間にいのちをふきこめば」（日野原重明 著）他人のために自分の時間を使うことの尊さが書かれている。しかし、子どもから「自分のために命を使うことも大事じゃないか」という疑問も生まれる。
- ・二時間目「走れ江ノ電 光の中へ」病気の子どもの江ノ電の運転士になりたいという夢をかなえるために、周囲の大人がお願いして一日運転士になるというお話。話のなかで主人公は「ぼくは助けてもらってばかりでいいのだろうか」という疑問もつ。それに対しみんなは「君は君のままがいい」と答える。この話では「自分のために生きる」ことの大切さが書かれている。一時間目とは違った「生きる意味」について子どもたちはさらに考える。
- ・授業が終わった後、日野原重明氏の別の著書「十歳の君へ九十五歳のわたしから」という本を読んだ子が、自分らしく人のために生きることの意味について考えを深めていく。

☆子どもたちが自分の問いをもち、みんなに問いかけたからこそ生まれた学びだといえる。

単元を貫くテーマ「いのちについて考えよう」 使用した教材とあらすじ

第1時「あなたの時間にいのちをふきこめば(D生命の暮さ)」

医者として多くの人の「いのち」に向き合った日野原重明先生。小学4年生のときに病気になる3ヶ月学校を休んだ。その後、母も病気になる。自分と母を診てくださった先生のような医者になりたいと思う。20歳のときに医学部に入学したが、結核という病気で一年間、ただただ寝ているだけの生活をする。大学を卒業して58歳のころ。飛行機の事件に巻き込まれ、3日間も閉じ込められた。「このまま死ぬのではないか。」と思ったが、命は助かった。「この命は与えられた命。生きることをゆるされた第二の人生を自分以外のことにさげたい。」と考えた。医者の仕事以外に、たくさんの方の命を救うことができた。江ノ電から見える海、電車を取り囲む生活のにおい、コンコンと響く心地よい電車のリズム、病気で共に生活してきたとくんにとって、生きている実感を感じられる時間であった。

その三日後、とくんは「ぼくは生まれてきてよかった？」とお父さんに問いかける。その問いにお父さんは、「もちろん。」でも、ぼくは何もしてあげられていない。「とくんは、とくんのままでいい。」お父さんの言葉をきき、とくんは天国へと旅立ちました。

第2時「走れ江ノ電 光の中へ(D生命の暮さ)」

生まれつきお母さんと同じ心臓病をもっている、とくん。大学の病院で治療を受けていたが、もう外出もできなくなってしまふ。とくんが電車が好きなのは、9歳のときに亡くなったお母さんに、幼い頃に電車のおもちゃを買ってもらったからである。難病の子どもの夢を叶えるというボランティア団体の力をかり、医師や江ノ島電鉄の協力のもと、とくんは1日だけ「江ノ電の運転手になりたい」という夢を叶えることができた。江ノ電から見える海、電車を取り囲む生活のにおい、コンコンと響く心地よい電車のリズム、病気で共に生活してきたとくんにとって、生きている実感を感じられる時間であった。

その三日後、とくんは「ぼくは生まれてきてよかった？」とお父さんに問いかける。その問いにお父さんは、「もちろん。」でも、ぼくは何もしてあげられていない。「とくんは、とくんのままでいい。」お父さんの言葉をきき、とくんは天国へと旅立ちました。

第1時・第2時の学習を踏まえて...

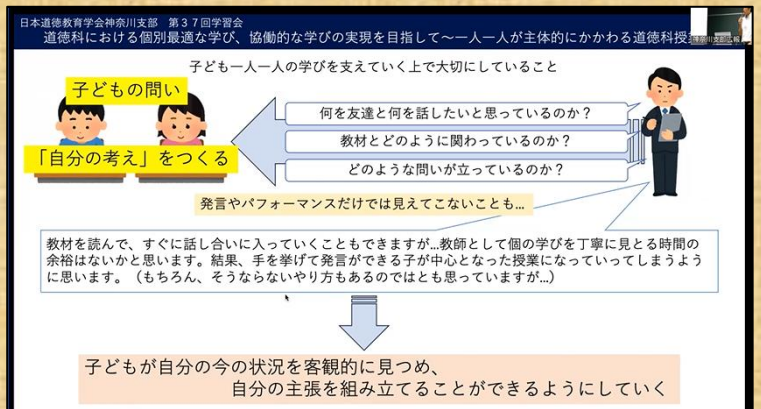
第3・4時(本時)「葉っぱのフレディ 命のたび(D生命の暮さ)」

フレディは、この春大きな木の梢に近い、太い枝に生まれた葉っぱです。親友は、誰よりも大きくなって、昔からいるような顔をしているダニエル。考えることが好きで物知りのダニエルは、フレディにいろいろなことを教えてくれました。暑い夏、木陰を求めて公園にやってくる人々のために、涼しい木陰を作ってやるのが、葉っぱの仕事の一つであること、一緒に生まれた同じ木の同じ枝の同じ葉っぱでも、さまざまな外的要因が違うため、決して同じ色には紅葉しないこと、やがて冬が来ると、自分たちは葉っぱの仕事すべてを終え、死ぬということ。けれど、死は怖くない、なぜならこの世は常に変化している、死ぬということも変化の一つであり、自然なことだということも、教えてくれたのはダニエルでした。初雪が降った日、大きな木に残っているのはフレディだけになっていました。フレディは、自分が色あせて枯れてきたように思いました。明け方、フレディは迎えに来た風に乗って、枝を離れた。痛くも怖くもありませんでした。一端空中に舞ったフレディが、地面に降りたそのことです。フレディは初めて自分が一生を過ごした木の全体像を見ました。たくましい木でした。フレディは、以前ダニエルから聞いた「いのち」という言葉を思い出しました。ダニエルによれば、「いのち」は永遠に生き続けるということでした。雪の上に降りたフレディは、目を閉じ、眠りに入りました。

フレディは知りませんでした。冬が終われば春が来て、雪は解けて水になります。枯れ葉のフレディはその水に混じり、土に溶け込んで、木を育てる力になっていくのです。

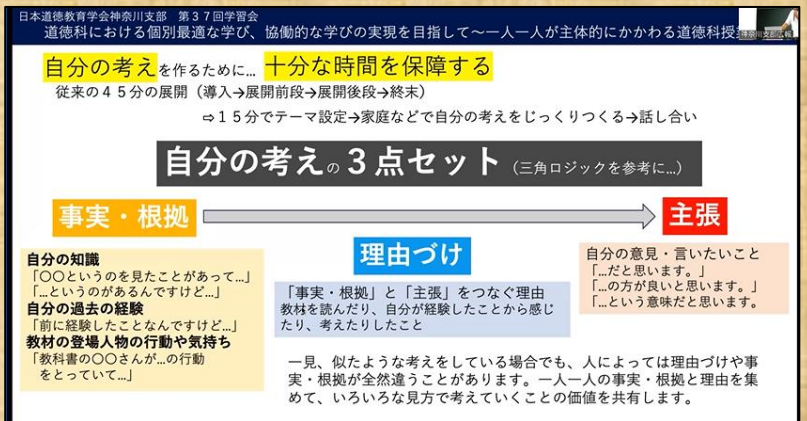
○子ども一人ひとりの学びを支えていくうえで大切にしていること

- 子ども自身が問いを作ることを大切にしている。しかし発言やパフォーマンスだけではわからないこともあるので、教師が今の子どもたちの状況を客観的に見取り、授業を組み立てることを意識している。
- ジャムボードやグーグルフォームなど ICT 機器を活用することで、意見を集約することもできるが、個々の学びや文脈やつながりを意識するのはこれだけではいけない。
- 子どもたち一人一人が自分の考えを作るために、モジュールや事前学習など、考える時間の十分な確保、そして次の3つを整理しながら、自分の考えを作れるようにしている。



- ①「主張」自分の言いたいこと。「○○だと思う」
- ②「事実・根拠」①を裏付けるもの
- ③「理由付け」①②をつなぐためのもの自分の感じたこと経験、理論

- 子どもたちが、自分の中に湧き上がってくる感情に対して、「なんでだろう」と論理的に分析していくプロセスが重要である。



○子ども自身が「めあて」を作るよさ

- ・導入時に、この授業に自分が学びたいことをまとめていくことで、自分の学びを作るために目的をもって話したり、目的をもって相手の話を聴いたりすることができる。
- ・ふり返り→分かったこと、理解したこと、これまでの自分を振り返り、今の自分にプラスしていく。
- ・子どもが深く考えられるような振り返りシートを作り、授業の視点や教師が授業で考えたことを伝える。
- ・発言できない子どもも発表できるようになったり、ふりかえりで教師に質問したりする子どもも出てくる。
- ・一人ひとりのめあてに注目していくことで、他のメンバーの考えも聴いてみたいという気持ちが生まれていく。
- ・子どものめあてと教師のねらい、願いをすり合わせながら授業をつくっていく。

日本道徳教育学会神奈川支部 第37回学習会
道徳科における個別最適な学び、協働的な学びの実現を目指して～一人一人が主体的にかかわる道徳科授業～

ふりかえりて学びを深めよう 道徳 ver.

みんなが話し合いを通して...
理解したこと

- ・どうして大切?〇〇のよさ「分かった!」
- ・分かっているけどできないのは、「どうして...?」
- ・友達と考え方や感じ方に「なるほど!」

見えてきた〇〇の強みが一面!

- ・視点を変えて考えてみると...
- ・新しいきもん

自分を見つめてみると...
分かったことをもとに、これまでの自分の感じ方や考え方について考えたこと

これから自分プラスしたいこと
自分について考えたことをもとに、これまでの自分をふりかえり、あらためて考えたこれからの自分...

日本道徳教育学会神奈川支部 第37回学習会
道徳科における個別最適な学び、協働的な学びの実現を目指して～一人一人が主体的にかかわる道徳科授業～

目的・目標を共有し、自分の考えをもって学ぶ子が一つの場に来ることで、一人では解決できない問いを解決しようとする場面が生まれてくる。友達と語り合いたいという思いを大切にします。

道徳的諸価値

子どもの思い (C) → 擦り合わせていく → 教師の願い (T)

話して反応を知りたい! (C) → 聞いてみたい! (C)

子どもが主体的に教材や他者とかわるために、子ども一人一人の自分の考えやめあてを大切にしたい

○授業中の話し合い

- ・授業は対話と議論をやっていく。クラス全員で意味のある話し合いを一緒につくっていく。
- ・子どもの意見を一覧表に打ち出しながら子どもたちのかかわりの可能性を考える、そして教師がどのような「出」ができるかを考えていくようにする。

日本道徳教育学会神奈川支部 第37回学習会
道徳科における個別最適な学び、協働的な学びの実現を目指して～一人一人が主体的にかかわる道徳科授業～

名称	目的など
雑談(chat)	おしゃべり、何を話すかは事前に決まてはいない 目的は、「相手のことを知る/理解を深める/暇つぶし/など」 話す内容はさほど重要ではなく、脈絡なく展開されていく
対話(dialogue)	あらかじめ論点が提示され、それについての情報や考えを話し、話すこと。 「ある情報を話したい/自分の考えを聞いてもらいたい/相手から情報を得たい/相手の考えを聞きたい/など」情報や考えの「共有」が目的
議論(discussion)	明確な論点が示され、「共有」だけでなく「決定(最良の結論)」する 自分の考えに正当性があると思えば、相手の考えを「批判」することも許される。 →しかし、相手を論破することが目的ではない。 <small>※必要以上に感情的にはならず、論理的に考え、話す ※批判しても否定はしない</small>
討論(debate)	互いの意見を述べ、いずれの論が勝っているかの優劣をつける。 互いの意見は変えない。
論争(argument)	相手を論破するのが目的 罵る/論点のすり替え

○板書で気を付けていること

- ・文字は基本的に白で書くようにしている。子どもの意見に強弱をつけないようにするため。
- ・書く時に、その子の話したことの文脈を崩さないようにしている。
- ・黄色は意見をまとめていくときに使う。
- ・黒板にいろいろな意見が書かれているが、「みんなの意見が合わさりながら、何か分かる」ということを大切にしている。意見の違いをまずみんなですべて受け入れていくことが大切である。

○授業をする中で意識していること

- ・板書は話し合いをまとめるツール
- ・子どもが考える立ち止まるポイントを作る。
- ・子どもの分からないこと、疑問を受け止める。
- ・子どもの価値観を揺さぶる問い返しを授業中盤につくる。
- ・話し合いが抽象、具体どちらにも偏りすぎないようにバランスをとっていく。
- ・子どもと教師がよりよい学びをつくっていく関係性を大切にする。

道徳科における個別最適な学び、協働的な学びの実現を目指して～一人一人が主体的にかかわる道徳科授業～

「先生の役割は...?」

「板書は先生が記録してあってほしいな。あとで写真でほしいし。」
「みんなの話し合いを聞いていて「伝わっていない」と感じたら「立ち止まりポイント」をつくる」
「気がなつたところは、「つっこみ」をいれてもいいよ!」

自分が意識していること

①授業中の「こそぞ!」という問い返しポイントを考えながら話し合いを進める

子どもの価値観を「**引き出し**」と揺さぶる問い返しを授業の中盤～終盤で「**ドン!**」と授

- ・子どもの主張の強みと弱さ
- ・矛盾しているところ
- ・人間の弱さ
- ・他の価値とのかかわり
- ・わかっているつもりになっているところ
- ・こうあるべきという固定観念
- ・ひっくり返し「本当にそう?」などの視点から...

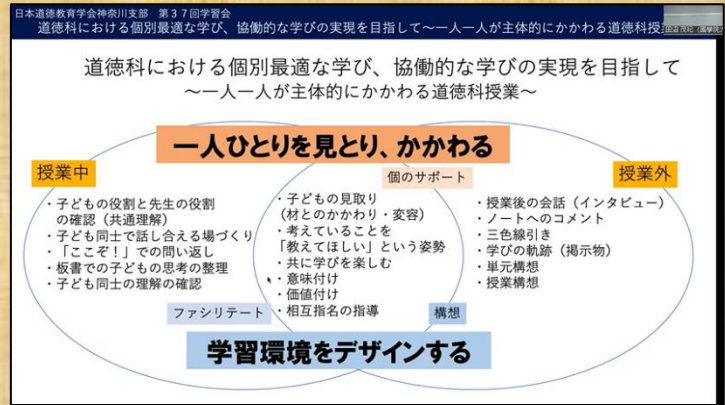
②子どもの話し合いが上滑りしていないかを見る

子どもの話し合いが**具体**と**抽象**のどのあたりをあるのかを考える

子どもと一緒に先生も「よりよさ」をフラットな関係で追求していこうとする

○提案のまとめ

- ・一人一人が問いをもち、協働で考えるプロセスを大切にす。
- ・教師が一人一人を見る、またそのための環境デザインを工夫していく。



○おわりに



- ・日本大通りにある、旧東京三菱銀行の写真→視点を変えて見ると、上の方に新しい建物が建っている。
- ・道徳科授業でも同様のことが言えるのではないかと。子どもと教師が話し合い、考えるという基本の上にもこれからは新しい理論やICT機器などの教具が重なっていくのではないかと。
- ・これからも子どもと教師と一緒に考えることを大切にしたい。

【質疑応答】

（参会者 質問①）

授業のはじめに「めあて」を立てることが大変な子にはどのようにしているか。また、めあてを立てることによる手ごたえはどのようなものか。

（提案者 回答①）

めあてが書けない子もいる。そのため一度書いたものを教師が見て主張、事実、理由付けを分類しながら、足りない部分を教えていくなどのサポートをしている。また繰り返し自分のめあてを書いていくことで、今日自分が考えたいことが分かってくるようになってくる。その場に応じて、子どもの今のめあてや考えたいことを交流するようにしている。

（参会者 質問②）

ユニットのなかで「命」について「命→他人のために」「命→自分のために」と異なる視点の教材を扱っていたが、それは授業中の「自分の命を自分のためにつかってもよいのでは」という問いが子どもから生まれたからそうしようと考えたのか、それとももともとこの教材を使う予定だったのか。

(提案者 回答②)

もともとこの二つの教材を使う予定であった。1時間目と2時間目に内容と違った視点の教材を用意してずれが生まれることを予想していたが、子どもたちからその視点の違いに関する「つぶやき」が出たので、それを活かすことができたと感じている。ここが教師の出どころでもあったと感じる。

(参会者 質問③)

教師と子どもが学びを作るという話があったが、「子どもたちがはじめに教材に対する考え方を考える時間」を設定することで、直感的な判断をそぎ落としてしまっていないか。答えがないものを話し合ううえで、考えを整理することは、その後自分の理論に必要な情報だけを選択することにつながってしまわないか。教師が問い返しを作るということは相互主体ではなく、教師が主体ではないか。子どもの違和感を教師が聞いていくようなアプローチの方がより相互主体的ではないかと考える。

(提案者 回答③)

児童の直感的判断については自分も大切にしている。直感で感じたこと、なんでそう思うかそこを論理で考えられるようにしている。そのために自分の考えをつくるさらに前に、子どもが最初に感じたことなどを、全体で話し合い共有ようにしている。そこから論理的に、自分の考えを整理している。「確証バイアス」などについては確かに教師自身が意識していく必要があると感じた。子どもを引っ張っているつもりはないが、そうならないように自身の声かけや立ち振る舞いなど改めて考えてもう一度考えていきたい。

(参会者 質問④)

一般的に言われている、学習の方法や過程を子どもたちが選ぶことを「学習の個別化」、学習の内容を子どもたちがつくっていくことを「学習の個性化」と考えた時に本当にそれができているか。単元もつくる、教材を選ぶ、問い返しの設定、板書計画、めあてを立てさせるなど、これは先生が主体のような気がする。

(提案者 回答④)

授業を振り返ると、確かに自分が授業をつくってしまっている部分もある。子どもに「させてしまっている」時もある、しかしそうならないために受け止めながら子どもと授業をつくるようにしている。課題と内容を子どもがつくるという視点では、課題みんなで話し合う時間を子どもたち自身がつくったり、調べたりする時間を設定したりはしていると感じる。

(参会者 感想④)

テーマは教師が決めているが一人ひとりの問が違うということを考えているところがよいと思う。個別最適化、協働的な学びについては今後も本学会で議論していきたい。

(参会者 質問⑤)

子どもをしっかり見取り、思わず話したくなるような授業デザインが印象的だった。今日の実践提案でも参会者の反応を意識した話し方からもそれが感じられた。そこから質問したいこととして、授業をする時に、どんなこ

とを主に考えているのか。「全体を見ているか」「一人ひとりの子どもの顔を見ているのか」「今後のことを考えているのか」「子どもの意見を大きく受け止めようとしているのか」などどんな視点をもって授業をしているかを知りたい。

(提案者 回答⑤)

教壇に立っているときは一人ひとりを見つつ、まわりの子を見ている。黒板を書きながら、発言している一人ひとりの表情を見ている。「ここを深めたいな」「この意見とこの意見がつながるかもしれない」など頭の中で考えながら目の前の子どもと授業をつくっている。

(参会者 感想)

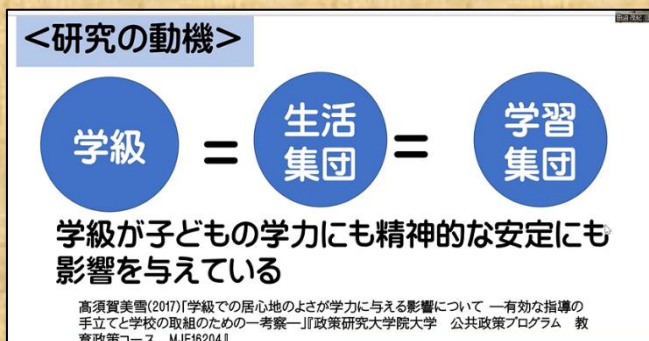
自分も授業中「子どもの反応を見ている自分」「授業展開を考えている自分」「実際に動いたり話したりする自分」など3つくらいの自分を客観的にとらえながら授業している。そのあたりもいつかお話を詳しく聞かせていただければと思う。

提案② 川口市立南中学校 森 美佐子先生(元麗澤大学大学院 学校教育研究科)

「互いを尊重し、よりよい人間関係を育む道德教育の実証研究—対話を生かした道德科授業による学級づくりを中心として—」

○研究の動機

- ・麗澤大学大学院での修士論文のまとめより提案。
- ・中学生にとっての学級の意味→「生活集団」でもあり「学習集団」でもある。
- ・クラスの安定は生徒の精神的な安定にもつながるといえる。



○望ましい学級集団とは

- ①規律、共有された行動様式がある集団
- ②強硬な人間関係があり、親和的な集団
- ③学習や学級活動に意欲的に取り組む集団
- ④自主的に活動するシステムがある集団

(参考文献) 河村茂雄 (2010)「日本の学級集団と学級経営」図書文化 59頁

○様々な学校で起こりうる学級経営の諸課題

- ・生徒の孤立、いじめ
 - ・ルールや規範意識の低下、学級の崩壊
 - ・社会の状況の変化による言葉の問題、価値観の違い
 - ・コロナ感染症による活動の制限
- そのための解決策を本提案で紹介

○道徳科と学級経営

- ・安全安心に過ごせる居心地の良い学級を作るために道徳科授業の「対話」からアプローチしてみる。
- ・答えの出ない問いについて、対話しながら、学級全体を良い方向に導きたい。
- ・ひとりでは答えの出ないことについて対話することで、思考力も高められる。

○研究テーマ

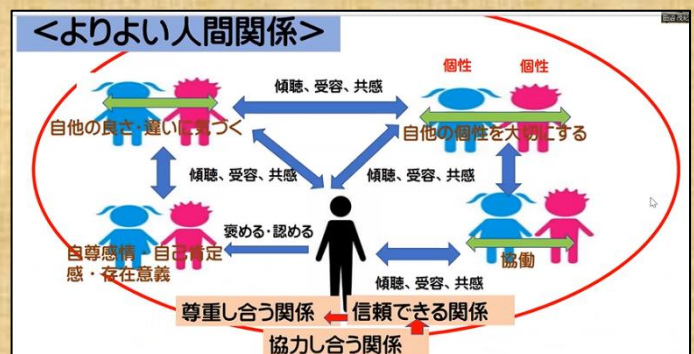
「互いを尊重し、よりよい人間関係を育む道徳教育の実証研究」
 —対話を生かした道徳科授業による、学級づくりを中心として—

< 研究テーマ >

互いを尊重し、よりよい人間関係を育む道徳教育の実証的研究

—対話を生かした道徳科授業による学級づくりを中心として—

○研究のイメージ



- ・対話することでよりよい関係を構築するといった理論は、様々な先行研究がある。

○カール・R・ロジャーズ
 人間は受容され評価されるときに自己自身を大切にする方向で成長する。
カール・ロジャーズ 島瀬直子 訳(1984)『人間尊重の心理学—わが人生と思想を語る—』創元社(110頁)

○パウロ・フレイレ
 信頼の関係は対話によって作りだされる。
パウロ・フレイレ 『被抑圧者の教育学 50周年記念版』亜紀書房 179頁

○金子晴勇
 自分と向き合い、心を開いて話を聞いてくれる友達や教師のおかげで、対話的な学習には喜びがある。
金子晴勇(1979)『対話的思考』創文社 3頁

○平田オリザ
 対話の基礎体力を小中学校のうちにつけることは重要である。
平田オリザ(2012)『わかりあえないことから—コミュニケーション能力とは何か』講談社 95-96頁

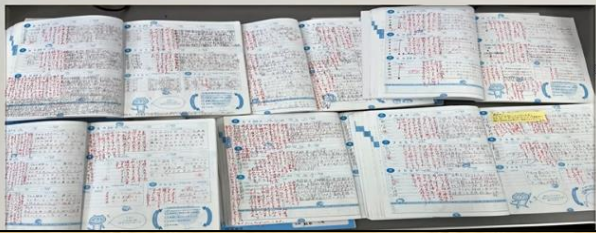
○対話の基礎体力

- ・対話することにより共有を図ったり、新しい発見をしたりする。
- ・等質の生活習慣、価値観を好む日本の社会では、「言わずとも察する」という特有の文化があった。しかし、これからは互いに違った価値観を共有することも大切だと考える。

○実践1 生活記録ノートを活用した実践例

<実践1>

教師と生徒の筆談的対話を生かした生活記録ノート
毎日生徒が書いて提出し、教師が返事を書いてやりとりする。



- ・対話の一つとしての筆談的対話
- 生徒との生活記録ノートのやり取り
- ・教師の生徒の見方を変えていかないといけない。教師側からの働きかけも重要である。

○教師のコメント改善

- ・具体的なやり取り、休み時間のうちにコメントをする。
- 具体的なやりとり、現在の心配とこれからの手がかりなど

○ノートに記述する内容の一例

< どんなことを記述すればよいか >

- ①どんなことがあったか。それについて自分はどう思うか。
- ②心配事や悩みがあったら、相談に乗ります。
- ③体調や心の痛みがある人は、私に話してほしいです。
- ④これをやろうと決意したことや、今、はりきっていることを教えてください。
- ⑤友達のことを教えてください。
- ⑥家族のことを教えてください。

十⑦「生徒の道徳の授業に対する思い」

②心配事や悩みの記述		担任のコメント
(2022.3.1.)最近僕はよく、このクラスともうすぐ別れるのか、と考えてしまいます。あと、1年くらい、このクラスにいたかったとよく思います。クラスが解散することを考えると、心が痛くなります。あと、1か月とちょっと、楽しんでいきます。		本当ですね。私もたまに、もうすぐこのクラスも解散するんだなど、考えることがあります。君がこのクラスにいてくれるおかげで、クラス全体が大きな声でいさつするのだと私は思っています。君の存在は、クラスにとっても大きいのです。

心のサインをノートでキャッチし、対面での関わりで負担を軽減する。
また体調面の異変も知ることができる。寄り添い安心できるように声かけなどを考えるようにしている。

○実践② p4cを生かした授業実践例

<p4cを生かした道徳科授業の実践>

○アメリカの哲学者マシュー・リップマン

「生徒自身が問題を探し、自ら探求すべきである。そのために教室を、生徒同士が敵対的、競争的でなく、友情と協力のある共同体にしなければならない。」

マシュー・リップマン 河野哲也・土屋陽介・村瀬智之 監訳(2014)『探求の共同体考えるための教室』玉川大学出版部 135-148頁

「我が国の道徳教育は心情主義的・道徳批判の流れにある。言語活動を充実・展開し、哲学教育を進めることが望ましい」

高口達(2013)「新しい道徳教育の提案に向けての予備的考察—言語活動の充実と哲学教育—」『哲学の探求』40号 哲学若手研究者フォーラム 2013年 5月123-132頁

「哲学対話実践の意義は道徳教育的な意義にとどまらず、生徒指導的意義にもつながる。一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の尊重を図りながら、社会的資質や行動力を高めるという生徒指導の目標と、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した一人の人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養つという道徳教育の目標の、両者を実現する手法として哲学対話は同根的なものだ」

- ・哲学教育は、道徳だけでなく、生徒指導にも有効である。

○教材「私のせいじゃない」を使った哲学対話

○豊田光世

- ①輪になって座る。
- ②対話の問いを決める。
- ③ルールを確認して対話を始める。
- ④対話を通して問いを探究する。
- ⑤時間になったら対話をやめ、評価を行う。

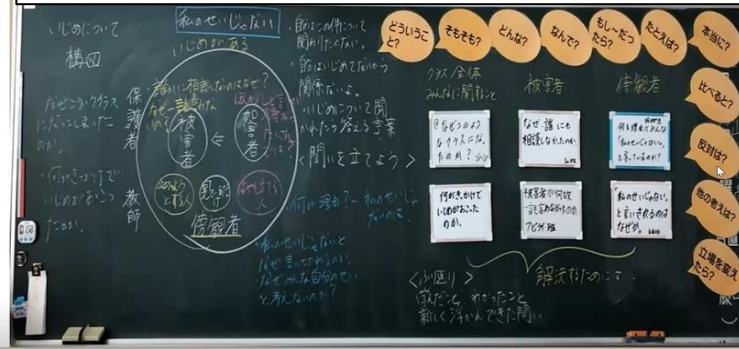
豊田光世(2021)『p4cの授業デザイン共に考える探究と対話の時間のつくり方』明治図書出版株式会社25頁

<1時間目授業の流れ>

- ① ねらい グループごとに問いを立てて、いじめはなぜいけないのか、いじめを解決するためにはどうしたらよいかを多面的・多角的に考え、話し合うことを通じて、誰に対しても公正に接し、差別や偏見の心持を減らそうとする心育を育てる。
- ② 導入 いじめの構造を振り返る。
- ③ 展開 テーマ：「いじめを考える」みんなで問いをつくり、話し合う。
 - I 教材を読んで、どんなことを考えたか。
 - II 立場ごとに問いを考える。
 - III 班で問いを選択し、その問いをもとに班で対話する。
 <ポイント>
 - 発言する人は毛糸の玉をもつ。
 - いじめをどう考えるか。どのようにすればいじめは解決できるのか。心と行為の両面から、多面的・多角的に考える。
 - 自分ならどんなことができるのか、自分事として考える。
 - IV どんな対話をし、どんな問いが生まれたかを班ごとに話す。
 <クラス全体、みんなに関することについての問い>
 - <被害者についての問い>
 - <傍観者についての問い>
- ④ 終末 授業を振り返って、考えたこと、感じたこと、学んだことを書く。

<2時間目授業の流れ>

- ① ねらい 1時間目のグループごとの話し合いをもとにして、いじめはなぜいけないのか、いじめを解決するためにはどうしたらよいのかを多面的・多角的に考え、話し合うことを通じて、誰に対しても公正に接し、差別や偏見のない社会をつくろうとする心育を育てる。
- ② 導入 1時間目の授業で、各班で話し合った問いと話し合った内容を発表する。
- ③ 展開 テーマ：「いじめを考える」問いを共有し、対話しよう。
 - I 1時間目の授業で教材を読み、各自が考えた問いの中から、2時間目に学級全体で話し合う問いを学級全体で話し合って決める。クラスで決めた問いを確認する。
 - II 問いをもとにして、学級全体でいじめについて話し合う。
 - 被害者はなぜ助けを求めなかったのか。
 - 現実に目の前にいじめが起こっているのに「自分のせいじゃない」と言い切るのはなぜか。
 この話し合いの途中で、「いじめが自分のいる場所であった場合、見ていだけ傍観者として、いじめに加担しているということになる、ということを知識として私たちは知っているけれど、本当に見ているだけでも、いじめに関わっているといえるのか。」という意見が出た。そこで、建前ではなく、本音として、自分がいる場所がいじめがあったとき、そのいじめを自撃している自分は、いじめに関わっているといえるのか、関わっていないといえないのかを話し合った。
 - III 「いじめのない世界」を作るために、どんなことが大切なのだろうか。



- ・いじめに対して、どうすればよいかをクラスで多面的・多角的に考える。
- ・話し合う中で子どもたち同士が自己開示していく姿が見られた。

○アンケートより

- ・道徳が好き、自分の考えを友だちに伝えられるようになった。
- ・QU アンケートではルールとリレーションの確立した親和的学級集団に改良されていった。

※今回、抽出児を決めてスキャット分析を何度も行っている。

<研究の検証>

研究の検証計画

調査対象
埼玉県内K市立M中学校 2年1クラス33人(男子19人、女子14人)
検証内容
○第1回 道徳アンケート実施(令和3年4月27日)
○第2回道徳アンケート実施(令和4年3月17日)
○第1回 Q-Uアンケート実施(令和3年6月15日)
○第2回 Q-Uアンケート実施(令和4年2月24日)
○SCAT分析(令和4年3月25日) 抽出生徒1人(N太)
○生活記録ノートの実践(通年実施)
令和3年4月8日と令和4年3月25日の生徒33人の生活記録ノート

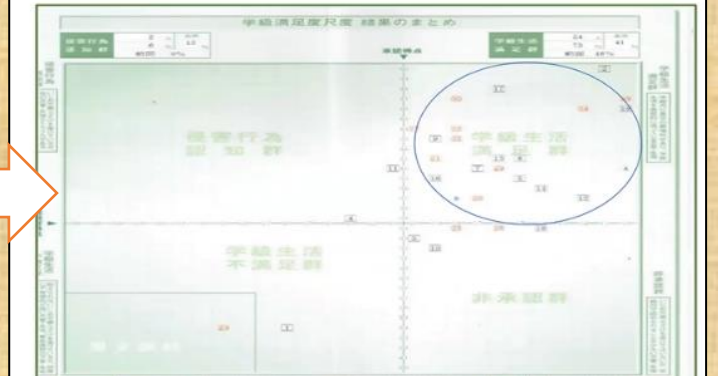
道徳アンケート結果

	学級平均値(点)		P値	t検定有意差
	2021.4.27	2022.3.17		
1 道徳科の授業が好きですか。	3.91	4.48	0.58E-03	P<0.01
2 登場人物の気持ちを通して、自分の気持ちを考えることができましたか。	4.45	4.55	0.41	n.s
3 授業で新しく発見したり、新たに学んだりすることがありましたか。	4.67	4.79	0.21	n.s
4 自分のことを振り返ることができましたか。	4.39	4.52	0.47	n.s
5 自分で考えて判断することができましたか。	4.12	4.36	0.20	n.s
6 進んで自分の考えを友達に伝えたり、ノートに書いたりできましたか。	3.79	4.27	0.03	P<0.05
7 友だちの意見を受け止めることができましたか。	4.70	4.76	0.54	n.s

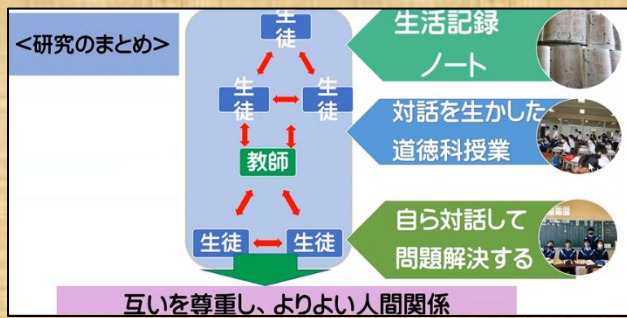
結果 学級満足度尺度の結果(2021年6月15日)



学級満足度尺度の結果(2022年2月24日)



○まとめ



- ・信頼関係を築けるようになった。
- ・対話を活かした道徳科授業を大切にする。
- ・教科や学活でも生徒が共同して取り組むようになった。

○課題

<研究の課題>

(1)生活記録ノート活用の課題
担任がコメントを記入する時間をどう確保するか。

(2)対話を生かした道徳科授業の展開方法の課題
登場人物の心情理解を中心に授業を進めるのではなく、複数の人間で考える必要がある課題について、対話を通して考えを深め、思考力を育成するような、道徳科授業を教師が展開していけるかどうか。

- ・担任のコメント時間の確保をどのようにしていくか。
- ・対話を生かした授業展開をする教師の指導力の向上を目指し今後も研鑽に努めたい。

【質疑応答】

(参会者 質問①)

自分も学級を担任している時は生徒指導ノートを活用していた。時間の確保をどうしたら生み出していたか。また学級経営する上で他にどんなことに気を付けていたか。

(提案者 回答①)

生活記録ノートのコメントは一時間で書くと自分で決めていた。学級経営に関しては、体育祭、合唱コンクールなどがある時期ほど、自分たちで話し合っって学級を作っていくという姿勢が生まれていたように感じる。道徳の問いを話し合えるようなクラスができれば、実際の生活を切り開いていけるようになっていけると感じている。また教室で自ら笑顔でいることを意識している。学校というところは楽しいところだということを心掛けるようにしている。

(参会者 質問②)

生徒どうしが意見を聴くことをどのように育てていくとよいか、普段の実践の中で、聴く力をどのように育てているかを知りたい。また、発表の中でP4C時間になったら評価するという、どのように評価しているかを教えてほしい。

(提案者 回答②)

自身は国語が専門なので、授業の中で聞く力を育てる。自分の感じたことをまとめることを中心に聴く力を育てている。また学校全体で話し合うテーマを決めて話し合う「フナトーク」(舟戸小学校で先行実施)という取り組

みを行っている。P4Cに関しては毎時間やっているわけではないが、「なぜ嘘をついてはいけないのか」「人生とは何なのか」答えのない問いをみんなで共有していく。自分の納得いく答えを全体で共有していく過程を評価と捉えている。

(参会者 質問③)

ノートや生活における見取りについて、どのようなことを意識しているか教えていただきたい。

(提案者 回答③)

自分の生徒の考えで「似ている部分」また自分と「違う部分」を認めていくようにしている。全てを振り返りに書いているというわけではないので、子どもの理解することを意識し~~+~~ている。

(参会者 質問④)

発表タイトル「よりよい人間関係を育む道德教育の実践研究」とあったが「生活記録ノート」は道德科授業というより「学級経営」「生徒指導」という要素の方が関連性が強いのではないか。道德における割合はどれくらいを考えているか。またアンケート結果の「道德の授業が好きな子が増えた」と「QUの結果の改善」を結び付けるのはエビデンスとして弱いのではないか。

(提案者 回答④)

昔、先輩の先生に道德の授業がきちんとできていれば学級経営はしっかりとできているという話を聞いたことがあった。自分の中で「それはなぜか」ということを大学院で研究したかった。違う考え方をもちた生徒同士が話し合うことで、今まで気づけないことに気づけるのではないかと感じている。道德をしっかりとやることで、学級経営につながると実感している。

(参会者 感想④)

QUのアンケートと同時、に道德の授業のアンケートも一緒にとると、より説得力のあるもの具体的になると感じた。

☆子どもを丁寧に見取ることからこそ「わかること」をこれからも大切に授業を考えていきたいと思いました。お二人の先生、ご発表ありがとうございました。